

「梅花女子大学」

「おしゃれの日」

——チャレンジ&エレガンスの実践——

藤原 美紀 ● 梅花女子大学企画部長

創立138年、いま育成する女性

梅花女子大学は、1878（明治11）年創立の梅花女学校を前身とする、キリスト教主義に基づく女子大学である。梅花女学校は、女性が教育を受けることが困難であった明治維新直後に、真の愛と教養を学び新しい日本の発展に寄与できる女性の育成という大きな使命と情熱をもって開校した。創立時の建学の精神を継承して138年。本学の目指す学生像は、自ら問題を発見し、その解決方法を見いだすことのできるチャレンジ精神あふれる女性。気品を備え、思いやりの心をもつエレガントな女性。これらを併せ持ち、積極的に社会に貢献する表現力豊かな自立した女性である。本学での学びを基に、卒業後、「仕事力あるおしゃれな女性」として社会で活躍し

てほしいとの思いを込め、さまざまな取り組みを行っている。

建学の精神を実践する「おしゃれの日」

実践の一つとして、毎月1日を、「おしゃれの日」にしている。「おしゃれの日」とは、チャレンジ&エレガンスを体現する日である。おしゃれといっても、ただ外見を着飾るということではない。TPOに合わせた身だしなみやマナーを心掛けるとともに、内面も磨き、他者への配慮や気配りのできる品性ある人として、いかなる場面においてもエレガントでスマートな身のこなしができるようになることを目標に、特に1日は、いつもより意識して、各自が考える「おしゃれ」をする日と定めている。

おしゃれを楽しむとともに、毎月のテーマも設定している。1月は「チャレンジ&エレガンス」、2月は「美しい姿勢で歩く」、3月は「いつでも笑顔」、4月は「おもてなし」。その他にも「審美眼を磨く」や「感謝」など、外見への意識とともに内面のちよつとした心掛けを月ごとのテーマにしている。毎月貼りだされるテーマポスターを見て姿勢を正したり、笑顔を意識するといったように、

継続すると自然に身に付くことが多いと感じる。外来のお客様から、「1日だからおしゃれしてきました!」と話題にしていたことも多くなった。キャンパスで撮影会や「おしゃれ」ポイントのインタビュを行い、「週刊おしゃれキャンパスちゃん」としてホームページやSNSで発信もしている。初めは「何を着たらいいのだろう?」「おしゃれの定義って?」など戸惑いの声もあったが、年月が経つにしたがって意識が浸透し、それぞれにおしゃれを楽しむことができるようになった。



日本一、おしゃれなガーデンキャンパスをめざして

キャンパスという学びの空間も、感受性やマナーを身

に付ける大切な場所だと考えている。本学は大阪北部の緑豊かな丘の上に位置しており、その環境から「茨木ガーデンキャンパス」と名付けられた。キャンパスは、四季折々の花が咲き、昨年4月には芝生広場に川の流れる水辺空間も誕生した。学生・教職員は、おしゃれで美しいキャンパスに通う者として立ち居振る舞いを自然に意識し、自分自身と向き合うようになった。また、職員が企画して、学生食堂でのピアノコンサートや花プロジェクトといったイベントも行われている。

日本一、感動のあふれるキャンパス

さまざまな取り組みや記念日があることにより、強制ではなく自然におしゃれの意識が醸成され、新しい行動も始まった。毎月15日は、キャンパスのいたるところで多くの感動に出会える大学を目指して、「感動の日」としている。まずは教職員が学生に感動を提供することを意識している。感動は、何ものにも代えがたいエネルギーとなるが、感動という無形のサービスは時としてとても難しいものである。しかし、日常の小さな感動を積み重ねることによって、日本一おしゃれで感動あふれる女子大学を実現することは決して難しくはないと考えている。

【國學院大學】

成人加冠式

—— 大人になった自覚を促す

石井 研士 ● 國學院大學副学長

國學院大學では、2008年から神道文化学部主催の行事として成人加冠式を行っている。古来、元服する者に冠をかぶらせた故事にならない、成人を迎えた学生を対象に式典を実施している。式は、加冠の儀、大学神殿奉告の儀、祝賀の三部構成で、全体で2時間ほどである。

前年の12月中旬に受付が始まるが、開始から数時間で50名ほどの定員に達してしまう。行事は神道文化学部のみならず全学部に開かれており、希望者が増え続けている。神社界からの支援によって多くの装束を用意などしているが今後一層の展開が望まれている。

参加する学生には二度の指導機会を設けている。白衣・白袴を着付けたことのない学生には、事前に着装指導講習を最低1回は受講するよう指導する。七五三のようにただ着せてもらうのではなく、大人になる心構えと主体

的な関与を促すためである。今一度は作法指導・習礼（しゅらい…事前リハーサルのこと）で、当日の「式」の流れの説明や作法の指導をし、着装する装束を決定する。

加冠の儀は新成人の入場から始まる。新成人の父母や教職員が見守る森厳とした雰囲気の中、新成人と加冠役が入場する。加冠役の教員が男子学生には成人の証しである冠、女子学生には釵子（さいし）を頭に着け、成人としての姿になる。その後、神道文化学部長



女子学生の釵子



男子学生の加冠



祝賀の舞



神殿奉告

が教職員を代表して祝辞を述べ、新成人代表が答辞を行う。

加冠の儀終了後、加冠役と新成人が学内に祀られている神殿に参拝する。神殿にて新成人が誓詞奏上の後、玉串拝礼を行う。加冠式の会場となつている祭

式教室へ戻るときには、できるだけ遠回りをして学内を巡行する。出

迎える学生や教職員の笑顔と拍手がうれしい。

祭式教室に戻ると、

祝賀の儀のための設定が整えられており、本学学生による雅楽、神楽舞が披露される。最後に進行役から成人加

冠式の終了が告げられると、場はとたんに厳肅さがうちとけホッとした和やかな雰囲気へと変わる。加冠式に参加した学生はもちろん、父兄の感慨はひとしおである。全員による記念撮影に始まり、家族や友人の間で笑い声が起こり、写真撮影が始まる。正装をした教職員は人気退室する際に、紅白の饅頭が記念品として贈られる。

成人加冠式は、両親や教職員の前で大人としての自覚を促すための儀礼であり、神殿に奉告することで決意を新たにす。行政による成人式とは異なり、本学の建学の精神である神道精神を具体的に表明し、体得するための重要な機会となっている。



記念撮影

〔聖学院大学〕

ウィーンの香りを運ぶ 創立記念音楽会

清水 正之 ● 聖学院大学学長

聖学院大学は、2015年に創立27周年を迎えた。創立記念の行事は、毎年10月に行われ、キリスト教主義による教育を根幹に据える本学として、創立を記念して全学礼拝を守るとともに、学外講師を招いて講演会などが催される。恒例の一連の行事のなかに、オーストリアのウィーン・フィルに所属し、ウィーンで活躍する演奏家によって編成された四重奏団をお招きして、本学チャペルを会場として催される音楽会がある。

この催しも2015年に第十一回を迎え、10月24日の夕刻に開催された。本年お招きしたのは、ウィーン・ピアノ四重奏団である。生粋のウィーン出身の著名な音楽一家フリーダー家の長男であるクレメンツ・フリーダーがヴァイオリンを、次男マクシミリアン・フリーダーがピアノをそれぞれ奏し、その二人に、ヴィオラにはウィー

ン・フィルでヴァイオリニストであったギウンター・ザイフェルト、チェロにグスタフ・リヴィニウスを配した四重奏団である。

演奏は、時に弦楽器だけによる曲目を交え、多彩なアレンジによって組み立てられていた。ベートーヴェンのピアノ四重奏曲変ホ長調に始まり、モーツァルトのヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲ト長調、シューマン、スクリャービンの奏でられ、最後に高橋幸代編曲の日本の歌のメドレー、タンゴのメドレーへと続いた。

ウィーンの音楽の香りをきわめて身近に、学生、大学関係者、近隣の市民の方々と共に心ゆくまで堪能した、秋深まる一夕の至福の時であった。

ちなみに、わが大学のチャペルは2004年11月に献堂式を挙行した。著名な建築家香山壽夫氏（東京大学名誉教授、元聖学院大学大学院客員教授）の設計による本学が誇る建築である。周囲に南欧風の建物群を配した一連のたたずまいは、中景遠景の眺望が特に美しい。チャペル内部は、正面に向かって、二階の席が一階のフロアーを取り囲むように円形をなしている。ここは日々の礼拝の中心であるとともに、入学式・卒業式など、恒例の大

学行事の会場ともなる。音響にも十分配慮された設計であり、その効果は極め付けである。箱船を模した中央部分の楕円形ドーム型の天井は、音響効果を一層高めている。室内楽の練達の演奏家によるハーモニーを、さらに芳醇さを増して堪能できるのもこのチャペルのもたらす恩恵である。

この日は、ウィーン四重奏団と大学の交響楽団、日頃から熱心に指導している教員とのコラボレーションもあり、ヘンデルの「王宮の花火」を軽やかに聴かせてくれた。ウィーン四重奏団には、わが交響楽団から普段の力量以上のものを引き出していた。演奏した学生も、これを機に多くを学んだであろう。晴れやかな彼らの表情が印象深かった。アンコールの声が続いたのもうなずける。

チャペルは私たちの大学の祈りの場であり、精神的な中心でもある。この夕べは、調和あふれる音楽にしばし耳を傾け、音楽を通して平和への願いに身をゆだねる貴重なひとときもなった。音楽会の終了後は、東日本大震災への寄付が呼び掛けられた。

創立記念音楽会には、学内関係者だけでなく、例年、多くの近隣の市民が参加してくださる。本年も、800人を超える来場者のうち半数以上が一般の方々であった。

恒例の音楽会を楽しみにして遠方からおいでいただいている常連の方も多い。ウィーン四重奏団の音楽会は、駒込にある聖学院小学校でも催され、こちらもまた盛況であった。まだ歴史の浅い大学において、この音楽会が地域貢献の具体的活動の一つとして定着していることは、私たちの誇りであり喜びでもある。

大学がこの埼玉・上尾の地に創立されてから、はや27年となることは冒頭で触れた。地域の町おこしへの積極的提言と参加、幼児・児童教育への貢献、地域福祉への実践的貢献などを通じて、地域の大学としてしっかりと埼玉および上尾の地に足を置いてきた。それらが、いま実りの時期を迎えている。今後も、教育活動・研究活動を通してなお一層、地域の活性化、地域の幸せの増大に貢献していきたいと願っている。

音楽という国際的な共通言語による、地域にも開かれたこの催しは、グローバルな人類の課題に学問的なまなざしを向け、普遍の真理を探究することに力を尽くすとともに、他方でローカルな課題に向き合い、具体的な場における実践と貢献を研究教育の使命に掲げる本学の存在根拠にかかわる重要かつ中心的な活動の表れである。いつまでも続けていきたい行事である。